

痛くない死に方 木が枯れるように、 倒れていきたい

井坂洋子

詩人



監督・脚本：高橋伴明
原作・医療監修：長尾和宏
製作：内規朗、人見剛史、小林未生和、田中幹男
音楽：吉川忠英 撮影・照明：今井哲郎
出演：柄本佑 坂井真紀 余貴美子 大谷直子 宇崎竜童
奥田瑛二
制作：G・カンパニー 配給・宣伝：渋谷プロダクション
製作：「痛くない死に方」製作委員会
2019 / 112分 / DCP
2月20日よりシネスイッチ銀座ほか全国順次公開予定

「痛い」との言葉を投げつける。

開業医への早道というように安直さから在宅医になった河田は打ちのめされ、先輩のベテラン在宅医に連絡。彼から終末医療の考え方やその実践を学んでいく。おまかに、そこまでが映画の前半である。

やがて、白衣にネクタイ姿だった河田が、シャツにチノパンというラフな格好で診療に行くようになる。先輩もシャツにデニムパンツというスタイルだ。肩ひじはらず、素朴で自然だが、あくまで患者に寄り添う先輩の考え方の大きな特徴は、延命治療をせず、自然な死に方を勧めるということだろう。

「過剰な点滴や延命治療を受けた人たちはみんな、痰や咳で苦しんで、ベッドの上で溺れ死んでいる」と彼は言う。終末期の自然な脱水状態を、死に至る枯れ方のひとつと捉えているのだ。その対極にあるのは、死を敗北と考えて、延命が至上命題となる病院の専門医のやり方だ。

心を入れ替えた河田は、肝臓がんの末期の男（団塊の世代）の主治医となり、人と人として触れあう姿をうらみ、宇崎竜童演じるその男は木工であり、用柳を作るのを趣味としている。「棺桶が軽くなるように減量中」「死に水も人目盗んで酒にして」などブラックユーモア漂う句が大半で、彼が河田に語ったそれらは画面に文字として大きく映しだされ、監督の遊び心を感じさせられる。ある夕べ、男は河田や看護師などとともに縁側で打ち上げ花火を眺めながら、一杯飲んで語らったあと、ひとりきりになって「強がるも拭いきれない死の恐怖」と書く。

自宅での花火見物のシーンは、男の彩りある最期の

象徴的なものであるが、私にはファンタジックに思えて、あまりしっくりこなかった。が、一人になっての川柳は、ファンタジーに少し辛味を入れたことで、印象に残った。この、川柳好きの木工の往生までのあり方や、医師との関係は、理想的だと思わなければならない。これはこれでひとつのケースだと思えないうけれど、なかなかの人物であった木工さんの死までの物語に、確かに映画の華や魅力はあるのだが、前半に登場した肺がんの老人のようなリアルさをあまり感じられなかった。

私事ながら、おとし私は母を自宅で看取った。母はその六年ほど前に、輸血に通っていた大病院で、もうあと数ヶ月と宣告された。本人にはなく、付き添いの私にだったことは幸いだったが、自宅で輸血してもらえない医師を探してほしいと言われた。つまり、病院から体よく放りだされたのである。

ネットで探すと二件だけヒットし、そのうちの一件は断られた。若いF先生が来てくれることになったのだが、訪問の看護師から聞いたところによると、在宅で輸血をしてくれる先生は都内でも片手で数えられるほどで、めぐり合えたのは運がよかったと言われた。F先生は百人もの患者を診察して回っていて、いつも分刻みで動いていた。診察は映画のように十日から二週間一度くらいであり、何かあれば看護師さんがすぐ来てくれることになっていた。インフォームド・コンセントはきちんとしていたし、輸血や血液検査の注射が上手で、痛くないと母は喜んでいて、どちらかと言えば、映画の前半で描かれた医師と患者のあり方に近いかもしれない。

映画では、河田は肺がんのステージ4という病院のカルテをうのみにして、肺気腫だとわからずに老人を苦しめてしまったが、F先生は、母の病気に対して、ある考えをもち、大病院ではできなかった治療を施してくれて、あと数ヶ月という命が六年のびた。最晩年の半年はベッドで寝たきり状態だったが、それまでは好きな短歌も作っていたし、台所にも立っていたか

ら、肝臓がんの木工のような週末の姿とも言えるだろうか。

これは映画では描かれなかった部分だが、ケアマネさんの親身な寄り添いや、ヘルパーさんのじつに丁寧で手早い全身清拭やおしゃべりなども、母の心身をとんとんに安らげてくれたことか。先生や看護師さんよりも、私たちに近い存在だったと思う。

けれども、母の終末期に痛みがなかったと言えばウソになる。ベッドに寝たきりになった半年間、下剤を飲んでも洗腸をしても、なかなか排便できず、看護師さんがおなかを押し、排便するたび相当苦しんだ。暑がって服をぬごうと胸をほだけたり、立ちあがろうと足をベッドから投げだしたりして、何度戻してもベッドから半分ずり落ちたような格好になり、目が離せなかった。また臨終際は身悶えして苦しんだ。

だから、映画の、痛い死に方を描いた前半がリアルに感じられたのかもしれない。介護していた娘が疲れて床にころりと横になる場面があったが、私にもそんなことがあった。

今思い返しても胸が痛むが、半年の間、母は二度泣いた。夜中のおむつ交換で、私が疲れのせいもあり、むしろくしゃして母をじゃけんにしてしまった時、そしてもう一度は、やはり夜中におむつを替えていて、疲れのせいか体が崩れて床に寝転がった時だ。

枯れ枝のようになって、母の感情が潤れることはなかった。心の波が絶えず打ち寄せていたのである。そのことが私の胸を刺したが、同時に介護する原動力ともなった。

母はしょっちゅう大きな音をたてて、ティッシュで痰をとって、一日でティッシュの箱がカラになった。私はその音が耳障りで仕方がなかった。痰なんて



©「痛くない死に方」製作委員会

自然に胃のほうへ流れていくのだから、そんなに気にすることはないと何度声を荒げたことか。また、ベッドから足を投げだして、立ち上がらせてくれと懇願する母に何度うんざりしたことか。

映画を観ていけば、終末期の人間によくあることで、いさかようこ◎自衛期間中、テレビもよく観たが、読書の習慣が戻った。若いとき読みこなした「カクマゾフの兄弟」がひどく面白い。

痛くない死に方